不死鳥の歌なんか聞こえない

—海のかなたの楽園と古ゲルマンの選民思想—

水　野　知　昭

I．謎の「楽園」Neorxna-wang

古英語 neorxna-wang（または neorxna-wong）の語義と語源について，従来よりさまざまな議論が展開されてきたが，いまだに決着をみていないようである。詩歌と散文を問わず，キリスト教の「楽園」を意味する用語ではあるものの，元来は「死者の魂の滞留地」を表わす異教時代の観念であったと推定されている[1]。この複合語の第二要素 wang は「野原」を基本義とし，ゴート語 waggs，古サクソン語と古高ドイツ語 wang および古ノルド語 vangr と同系である。しかし第一要素 neorxna-の関連語彙については不詳であって，wang のそれぞれの同系語にこのような用語が付されるのは他のゲルマン諸語には認められず，古英語独自の現象である。そのために，neorxna-の語源と neorxna-wang の語義をめぐって，たとえば次のような諸説が提示されてきた。

1）neorxna-を*neweorcsa「労働のないこと（ne＋weorc）；休息；平安」に由来するとみなし，問題の複合語を「死後に至福の者が赴く，労働と苦悩のない，安息の野」の意味に解する説[2]。

2）*neorxu の語形を推定し，アングロ・サクソン人が思い描いた「運命の女神」（北欧神話に登場する nornir に対応）をさすと説き，エッダ詩に記されているように，異教の神々が盤戯に打ち興じて（「巫女の予言」7－8節），安楽に住むイザヴォッル（Iðavöllr）という野原と神話的に深い関連を有する[3]。

3）*ner と「所属；由来；出自」を表わす接尾辞*(i)ska から成る*neorscna が，音韻転倒を生じた語形とみなし，*ner を神名ニョルズ（Njörðr＜ゲルマン祖語*Nert-）に関連づける説。その場合，Neorxnawang は「ニョルズ（ラテン名 Nerthus）に帰属する者の野原」を意味し，ひいては「冥府の，死者たちの野」がその原義であったとされる。「地下界にある魂の領域」という異教の観念が，「楽園」そして「至福の者がおもむく天上の園」というキリスト教の概念に転用されたと説く[4]。

4）*neorh-suna「地下界の息子たちの」（複数属格）と解し，この第一要素をサンスクリット語*nāraka-「地下界；冥界」に関連づけたC.ウーレンベックは，先述したライツマン説には従いがたいとしながらも，「神名 Nerthus（ニョルズ）との関連は否定できない」と言っている[5]。

5）neorxna-が印欧語根*(s)ner-「回転させる；巻きつける；（束ねて）より合わせる」に遡及すると考え，さらに語根*(s)ner-の拡充形として*nerq-を推定し，そのゲルマン系語

根 Germ.*nerh-と，動詞的抽象名詞（女性形）を形成する接尾辞 sni-が結合して，古英語の語形*neorx(e)n-が生じたと説く。そして，古ノルド語 norn「(糸紡ぎ車を回す）運命女神」，古スウェーデン語 nyrna「密かに伝言する」，中世英語 nyrnen「祈禱を唱える」，および中高ドイツ語 narren「ぶつぶつと唸る」などのゲルマン諸語と関連するとみなし，*neorx(e)n-は「約束；告知」の語義を有していたと想定し，したがって Neorx(e)na-wang は原義的に「約束の野」，あるいは「告知の野」を意味していたと説く[6]。

6）「豊饒と富；航海安全；漁労」を司るニョルズ神（Njörðr）と古英語 ge-neorð「満足した」が語源的に関連すると説き，nerþka または nerþke「喜び；満足；悦楽」の語形を想定し，Neorxna-wang を「喜びと悦楽の園」の意に解する説[7]。

Neorxna-wang をめぐるその他の諸説については，R.イェンテの著を参考にされたい[8]。上記の説のうち，3）ライツマン説と4）ウーレンベック説，および6）ホルトハウゼン説は視点を異にしているが，Neorxna-を神名ニョルズと関連づけている。しかし，いずれも大方の賛同を得るには至っていないようである。しかも困ったことに，ニョルズの語源そのものについても完全に決着がついたわけではなく，古アイルランド語 nar-「人間」やギリシア語 anér「人」およびラテン語 neriosus「強大な」に関連づける説があるかと思えば，リトアニア語 nérti「水に浸す」，またはラトヴィア語 nārsts「(魚類・両生類などの）卵塊」との関連で印欧語根*nertus「生殖」に遡及するという主張もある。あるいはまた，ギリシア語 nérteros「地下界に属する」や古ノルド語 norðr「(死界が位置する）北方の」に基づき，神名ニョルズ（Njörðr）の原義を探る試みもある[9]。

Neorxna-wang をめぐって推定された数々の語義のうち，はたしてどの基本概念がキリスト教の「楽園」観念を表わす用語として後代に転用されたのだろうか？　この難問を解決するに際して，ニョルズの神名の由来それ自体の決着がついていない現状では，どうやら語源論のみでは限界があるようである。

II．フォールクヴァンガル「軍勢の野」と高天原

さて「ユングリンガ・サガ」4章の記述によれば，「ヴァニル（ヴァン神族）の間に流行していたセイズ（seiðr）という呪術を，フレイヤが最初にアース神たちに伝授した」とされる[10]。言うまでもなく，女神フレイヤはニョルズの娘である。P.ブーフホルツが説いているように，セイズ呪術は，霊媒師の脱魂状態（エクスタシー），補助霊，他界への旅，および変身のイデオロギーなどの基本要素をふくみ，北方ユーラシア一円に広がるシャーマニズムの一種であると考えられている[11]。そしてセイズは，ウーティ・セタ（úti-seta）と称されたように，霊媒師や予言者としての巫女がまさに「戸外に座して」，通常は夜間に行なわれた呪術であった[12]。

したがって，仮に上記5）の説に従って，さらにその根底にセイズ呪術を想定するならば，Neorxna-wang の原風景として，「祈禱や秘密めいた呪文」を唱える祭司や巫女が，精霊と交信し神懸りしたその声によって，「神々の託宣を下す野原」いわばウーティ・セタの聖地を想像できるだろうか。しかし5）の仮説を提示した W.クログマンは，管見にふれる限り

では三つの論稿において Neorxna-wang の語源を論じたにもかかわらず，ニョルズ神との関連の有無については一切言及しなかった[13]。だが，セイズ呪術がヴァン神族に本有のものであったという記録に重きをおけば，「聖なる野原」（古英語 wang・古ノルド語 vangr）に降臨する神霊が，ヴァンの主神としてニョルズの原の姿だったのではないか。

ちなみに古ノルド語 vangr は，雷神ソールと女神フレイヤのそれぞれの居住地Þrúðvangar「力の原」と Fólkvangar「軍勢の原」の第 2 要素に用いられている。ソールの領国とフレイヤの住居について次のように記されている。

［1］　かれ（ソール）は，スルーズヴァンガルと呼ばれるところに領国（リーキ）を持っていて，その館はビルスキールニルと呼ばれている。その広間には五百と四十の仕切られた部屋がある（「ギュルヴィの幻惑」21）[14]。

［2］　彼女（フレイヤ）は，天のフォールクヴァンガルと呼ばれる住居（ベール）を持っていて，彼女が戦闘の場に馳せ参ずるところでは何処でも，半数の戦死者を彼女が受け取り，そして他の半数をオージンが受け取るのだ（「ギュルヴィの幻惑」24）。

近稿で述べたように，神界を守護するソールにとって，その卓越した「神力」（アース・メギン）の発する根源の地が，Þrúðvangar「力の原」であったと解しうる。540の部屋を有する館というのは一見奇妙だが，3 の 3 乗× 4 × 5 と考えれば，完全数 3 を基礎にした，「鉄壁の守り」を表徴したマジカルナンバーとみなしうる（水野2002a）[15]。一方 Fólkvangar と呼ばれる，フレイヤの住居あるいは領地（bœr）が，「天」に位置づけられており，ソールの「力の原」の名称と同様に，多分に生と死の両義性をひめた-vangar がいずれも複数形であることに注目したい。その単数形 Fólkvangr は「民の原」もしくは「軍勢の原」の両様に解釈できる。第一要素 folk または fólk の関連語彙として fylki「地方；郡」や fylkir「領主」および fullr「満ちあふれた」などがあげられる。ある「同一の家族の構成員」（heimilis-fólk）や，「教区民」（sóknar-fólk），「同じ宴会に集う人々」（boðs-fólk），「教会に参集した人々」（kirkju-fólk）などの用語を基に，folk または folk「民」の辞書的な定義を試みれば，小は家族から大は共同体に至るまで[16]，ある特定の集団に帰属する成員を統括した概念であったように思える。

古英語 folc や古サクソン語・古フリージア語・古高ドイツ語 folk は一様に短母音であるから，古ノルド語でも「民」を意味する場合には，元来は短母音語幹で folk の綴り字であった可能性が高い。おそらく「特定の共同体の民」（folk）の中から選りすぐった戦士の集団が，ある fylkir「主長」のもとに統率されたとき，fólk「軍団」や fylki「戦士部隊」の名で称されたのだろう。ヤン・ドゥ・フリースによれば，folk は印欧語根*pelə「いっぱいに満ちた」に遡及し，「民衆」よりも「戦士集団」の方が古義だとされ，tún「垣で囲まれた草地」（ドイツ語 Zaun；英語 town：古義は「村落」）にて訓練をうけた herr「戦闘集団」の意味に近いとされる[17]。そうすると，複数形の Fólkvangar は区画された野原のそれぞれの場所で訓練にいそしむ戦士集団の風景を連想させる。フレイヤの父神ニョルズが Nóatún「船の囲い地」に住むという神話と，根底で結びついていると言えよう。

フレイヤが馳せ参ずる víg「戦闘」の場は，通常の実戦ではなく，fólk-víg「異族間の総力戦，血で血を洗う激闘」といった意味合いを有する（「巫女の予言」24節の用例参照）。女神の居住地としての Fólkvangar は，fólk-víg「軍勢の激闘」と明らかに緊密に連合されている。すでに卑見を示したように，víg「激闘」は，神秘の女性グッルヴェイグの名に含まれた第二要素 veig「呪力；強力な酒；神秘的な魔力を発揮する女性」と語源的に関連している。「巫女の予言」21節に登場している Gullveig について，「黄金の呪力」，「黄金色に輝く蜜酒」および「黄金で飾りたてた女性」など，いわば複合的に解釈すべきことを近著でも主張した（水野2002b）[18]。

ちなみに víg の動詞形は vega であるが，古代呪術の思想体系によれば，vega「（宿敵を）討伐する」ことと「勢いよく生長する」ことが相互連関をもって捉えられていた（水野2001d）[19]。言い換えると，「神としての戦闘力」（アース・メギン）を発揮するソールと「大地豊饒力」を体現するフレイヤが，共通して-vangar と名の付くところをを領有するという神話は，この視点に立てばよく理会できる。この場合，複数形 vangar を両義的に「戦闘と豊沃の野」の意味に解した方がよいだろう。ちなみに「グリームニルの語り」14節では，フレイヤの領有地の名称が単数形（Fólkvangr）になっており，「フレイヤがその広間（salr）での座席選びにおいて決定権をにぎる」とされる[20]。古ノルド語 salr は原義的には「垣で囲まれた聖域」を意味し，ゴート語 saljan「犠牲を捧げる」と同系である[21]。したがって víg「激闘」の地においてフレイヤによって選び出された「半数の戦死者」は，視点を変えれば，女神に捧げられた犠牲者であり，天上界にあるフォールクヴァング「激闘の原」の館にて，この女神の歓待をうけるという着想があったように思える。

というのは近著にても論じたように，古北欧の死生観によれば，勇敢に戦って死を遂げた者は，誉れ高き戦死者の宮殿ヴァルホッルに迎え入れられ，ヴァルキュリャと呼ばれる乙女たちの歓待を受けるとされた。また溺死した者は海の女神ラーンのもとへ赴くが，病死者や寿命が尽きて死んだ者は，地下の死女神ヘルが領有する冥府にくだると考えられていたようである（水野2002b）[22]。そして義人はすべて天上界のギムレーに行き，そこに建つ館にて永遠の至福を授かるとされる。

［3］　かの女（巫女）は見る，
太陽よりもうるわしく
黄金に葺かれた館が
ギムレーに建てるを。
そこには真正なる
戦士たちが住まい
とこしえに至福を
享受するのだ。　　（「巫女の予言」64）[23]

南方には「天」（ヒミン）の上に，第二，第三の天界があり，ギムレーはそれらを超え出た至上天に位置し，「光の妖精たち」が住むとされる。ラグナロクのとき，スルトが炎の剣をもって世界を焼き尽くし，「天」（ヒミン）と「地」（ヨルズ）が滅び去っても，このギム

レーは不滅だと記されている（「ギュルヴィの幻惑」17）。ギムレーという名は「火の襲撃から守られたところ」を意味し，「すぐれて勇敢にして信義あつき人たち」のみが選ばれて赴くあの世での楽園を表象している。それに対して「邪悪な輩（やから）」は，「ヘルに行き，さらに奥なる地下の第九の領域ニヴルヘルにくだる」と記されている（「ギュルヴィの幻惑」3）。

したがってこの図式を当てはめれば，北欧版の「中つ国」とも言うべきミズガルズの戦場にて死せる勇士たちは，ヴァルキュリャ（「戦死者を選ぶもの」）の風貌をもつフレイヤ女神によって選別され，天上界の Fólkvangar（「民の原」もしくは「軍勢の原」）に連れ去られ，来世を享受する，という思想があったとみなしうる。フォールク・ヴァンガルは，日本神話における「高天原」の空間概念と部分的に共通しているかに見える。それぞれ女神フレイヤとアマテラスがその天上界を領有している。高天原の「天」は，「海」（アメ）の意味を兼ねているとされ，「原」は国原・海原・天の原のように陸，海，空のいずれをもさし，「うち開けた広いところ」をいう，と解されている[24]。その意味では同様に，後述するように vangr も，大地・天空・海の三界における「原」の概念を包摂していたようである。ただし，フォールク・ヴァンガルが選りすぐった戦士集団の死後の滞在地のイメージが濃厚であるのに対して，高天原は，アマテラスもしくはタカミムスヒを主宰神とする諸々の天つ神が臨在する天上界であって，これら主宰神の命令によって，天若日子やタケミカヅチや天の鳥船の神あるいはニニギノミコトなどの，特定の選出された神が地上に降臨（「天降り」）する原点であった。『古事記』の語るところによれば，「葦原の中つ国」において「ちはやぶる荒ぶる国つ神」を平定（「言向け和す」）するために，これらの神々が段階を追って地上に派遣されている。

このように高天原には，天上界の軍事的拠点ともいうべき基本概念がひそんでいる。こうしてみると，巨人退治の神ソールの領有地としてのスルーズ・ヴァンガル「力の原」にも，類似した着想を嗅ぎとることができるかもしれない。別名スルーズ・ヘイム「力の国」とも呼ばれたその領有地は（「グリームニルの語り」4），ソールの敵対者であった巨人族の国ヨトゥン・ヘイムの対立概念にほかならない。「神々と人間たちのなかで最も強い」と称えられたソールは神界と人間界の守護神であったが（「ギュルヴィの幻惑」21），あわせて豊饒を招く神として，アイスランドに植民した人々によってオージン以上に崇拝されていたことが知られている[25]。また拙論で定義づけたように，危難に際して，その名を呼べば現場に馳せ参ずる神であった（水野2000a）[26]。540もの多くの部屋を備えていた館の名称 Bilskírnir は，「瞬時にして（雷光を）放つもの」と解することができ，まさしく雷神としてのソールの特性を表徴しているが，元来は魔の軍勢に対抗する戦士たちのかくまわれた館とみなされていたのではないだろうか。この推定に立てば，フレイヤとソールがそれぞれ司っていた「軍勢の原」と「力の原」は，地上界より連れ去られた戦士たちが寄り集い，また危急のときに神命を帯びて地上に派遣されゆくための二種の vangar「神聖なる原」として，相補的な関係に置かれうるだろう。

III. 天上界の「原」の概念

ゴート語 waggs がギリシア語 parádeisos「楽園」の訳語に充当されていることはよく知られている（「コリント後書」12章4）[27]。パラダイスの原義は「周囲を円く囲んだ園」（アヴェスタ語 pairi-daēza）だが，聖書のなかでは大別して，1）アダムとエバが住んだ「エデンの園」，2）喜びに満ち地上の幸いがあふれた浄福の地，3）神の臨在を仰ぐことができる「至福の天」，という三種の意味で用いられている[28]。この「コリント後書」の用例は，使徒パウロの魂が，その死後に「肉体とともに，あるいは肉体を離れてか」は定かではないとされるが，「第三の天にまで上げられた」ことを語っている（12章2－3）。したがって waggs は，ここではパラダイス3）の意味で用いられており，至福の者のみが赴くことができる「天上の楽園」をさしている。過去の拙稿においてさらに次のような説明を与えておいた。

ヘブライ的な観念によれば，天界は7層から成り立っており，第2層に雲界，それを超え出たところ，第3層から第6層にかけては，種々の位階の天使が住み，最上階に神の住み処があると信ぜられていた。ところが，ゲルマン的な天界観念においても，少なくとも南天は4層を成すものと考えられ（「ギュルヴィの幻惑」17），複数の位層を形成するものとして捉えられていたことは明白なのである。たとえば，heofena Helm「天（複数属格）の守り主」（『ベーオウルフ』182）や under heofenum「天（複数与格）が下にて」（同52；505）などの表現にその事が窺い知れる（水野1984）[29]。

ちなみに『ベーオウルフ』詩では，たとえば helm Scyldinga「シュルド族の守護者」が世俗の王としてのフロースガールをさすのに対して，heofena Helm「天の守護者」は旧約聖書の唯一神をさす名称として用いられている。改めて「ギュルヴィの幻惑」を参照してみれば，「南方には」通常の，多分に可視的な「天」（ヒミン）の上に，Andlangr（「周縁に広がりわたるもの」の意）と呼ばれる天（ヒミン）と，さらには「第三の天（ヒミン）」として Víðbláinn（「はるかなる青きもの」の意）が存在する，と記されている。そして，その第三の天界の上（またはその中）に，先述した「不滅の天域」ギムレーがあるとされる。R. ジーメクの近著には，「このような3層もしくはそれ以上の階層をなす天界の観念は，完全にキリスト教（の影響）に基づいている」，という註釈が加えられているが[30]，それぞれの天界の名称はさておき，異教時代より複数の天界の観念が存在したことまでをも疑うべきではあるまい。

ギリシア語 parádeisos の訳語に充てられたゴート語 waggs が，使徒パウロのように至福の者が赴くことができる「第三の天」としての「天上の楽園」の意味で用いられたことを想起すれば，フレイヤ女神によって選出された戦死者が赴く Fólkvangar は，同じく「第三の天（ヒミン）」ヴィーズブラーインに位置すると考えられていたのではないだろうか。

「すべての館のなかで最も美しく，太陽よりも輝かしい」ギムレーと呼ばれる salr「館」が，「南方の天の最果て」にある，と記されている（「ギュルヴィの幻惑」17）。ここで「最果て」

の訳語を与えたendiは，同じく南方に広がる第二の天Andlangrの第一要素and-「周縁に」（ドイツ語entlang参照），もしくは「前方に」（ラテン語ante）伸び広がる空間概念と対応しているように思える。いわば第三の天としてのVíðbláinnがこれら両者の中間に布置されることによって，3層または4層をなして「閉ざされた天（ヒミン）」を形成している。複合語Víðbláinnは形容詞víðr「広い」（ドイツ語weit）とbláinn「青きもの」から成っているが，第一要素は同時にvíðir「広がり渡る海原」（詩語）と関連があり，第二要素Bláinnは，Brimir「波立ちさわぐもの」とも称された原古の巨人ユミルの別名となりえた（「巫女の予言」9）。北欧の創世神話によれば，殺されたユミルの「血」から「海」が造られ，そのhauss「頭蓋骨」から「天」が造りなされたという（「グリームニルの語り」40）。語源辞典をひもとけば，hauss「頭蓋骨」は原義的には「すっぽりと覆うもの」を意味し[31]，まさに広大なる天空の丸天井（天の蒼穹）を連想させる用語である。いわば南方のendi「最果て」において，sær「海」とhiminn「天」の接合する領域がVíðbláinnであると想像されていたのではあるまいか。高天原の「天」が，天空（アメ）と大海（アマ）の意味を兼ねていたというが[32]，それと相似してVídbláinn「はるかなる青（黒）きもの」は天と海の両義的な空間概念を表わしていたと考えておきたい。

先述したように，永遠に不滅とされるギムレーの天域において，「真正なる“戦士たち”（dróttir）」（巫女の予言64）もしくは「正義の（勇敢な）人」（「ギュルヴィの幻惑」17）が死後の至福を享受するとみなされていた。しかしその一方では，「いまや，その場所（ギムレー）に住むものは光の妖精たちだけである」と明記されてある（「ギュルヴィの幻惑」17）。オージン神に擬定される，このハールの発言は，「真正なる戦士」や「正義の武人」と呼ぶに値する異教の雄がもはやこの世にいなくなった，という慨嘆の声にも聞こえる。というのは，典型的には「巫女の予言」45節に記されているように，「兄弟同士が互いに争い，殺戮にふけり，従兄弟たちが同族を裏切る」時代となり，「斧の時代，剣の時代，嵐の時代，狼の時代」が来て，やがて「世界は没落の一途をたどる」ことが予言されているからである。

さて，妖精には二種族があって，闇の妖精族が「大地の下に住む」のに対して，「光の妖精と呼ばれる種族（fólk）」はÁlfheimrに住んでいるとされる（「ギュルヴィの幻惑」17）。そして前者が「瀝青よりも黒い」のに対して，後者のグループは「姿かたちが太陽よりも美しい（fegri）」と記されているが，この修飾語句は，「最も美しく（fegrstr），太陽よりも輝かしい」というギムレーの「館」に関する語句とほぼ符合している。また，闇の妖精族とは異なり，光の妖精たちのことを，先述した用語fólk「種族」で一括していることに注目されよう。天上界のFólk-vangarに「住居」をもつフレイヤには，どこか光の妖精族と共通する特性が認められる。ちなみにフレイヤとは兄妹にあたるフレイ神は，歯が生えはじめる幼い頃に，神々によってÁlfheimr（「妖精の国」の意）という館を贈り与えられたという（「グリームニルの語り」5）。これらの兄妹神が光の妖精たちのfólk「種族」とある特別な関係に置かれていたことは明白である。

すでに詳論したことだが，「アース神の中での守護者」の役を果たしていたフレイは（「ロキの口論」35），gunn-Freyr「戦いのフレイ」，hjör-Freyr「剣のフレイ」，あるいはvíg-Freyr「激闘のフレイ」などのケニングにも示されるように，本来は戦闘神の性格がより濃厚であった（水野2001a）[33]。Freys leikr「フレイの遊戯（ゲーム）」が「戦闘」を意味する

ケニングとなったことも（「ハラルド美髪王のサガ」15章），その推論を裏付けてくれる（水野2001c）[34]。とすれば，fólk「種族」または「軍勢」の名で統括された光の妖精たちも，フレイを補佐し，戦闘に関与する集団とみなされていたのではないかと推定できよう。あるいはまた，ヴァルキュリャと称する乙女たちが，戦死者をヴァルホッルの宮殿に連れ去るオージンの補佐役を務めていたことと相関的に，光の妖精の「種族」（fólk「軍勢」）は，その戦死者の半数を受け取るフレイヤに奉仕して，まさに天上の Fólk-vangar に住みついていたという神話を想定した方が正鵠を得ているかもしれない。

Ⅳ．決闘の野原と館の連想について

さて，古ノルド語 vangr と同系の古英語 wang が「水豊かな光輝く野」を意味し，古ゲルマンの「楽園」の基本概念を有していることについては既に詳論したが（水野1984）[35]，たとえば次の古英詩「創世記」の用例に見るように，問題の neorxna-wong が旧約の「エデンの園」の意味に転用されている。

［4］　　“エデンの園”（Neorxnawong）は
うるわしくも霊妙にして　　恩寵に満たされ
とわに続く至福に恵まれていた。　　湧きたつ泉
流れる小川が　　その心地よき土地を
潤すさまは実に美しい光景だった。　　（「創世記」　208-12）[36]

「水豊かな楽園」の基本イメージは，旧約聖書の「創世記」（2章10－14）の記述を踏襲している。その他ここではあえて引用しないが，neorxnawang（または neorxnawong）が創世記の「エデンの園」を表わす用例を参照されたい（Genesis　171；217；889；929；944；1924の各行）[37]。たとえば古英詩の「創世記」929行と944行では，禁断の果実を食べたアダムとイヴが neorxnawang「エデンの園」から追放される文脈で用いられている。その罪を犯したことにより，アダムは「栄光を奪われ」，エデンの園とは異なる「他の“故地”（eþel）」を求めて，さ迷うことが宿命づけられ，「肉体と“魂”（sawol）の分断が定められた」，と記されている（927－31）。また同じ語が，古英詩『キリスト』では beorhtne bladwelan「光輝あふるる豊かな富」を満喫できる「天国」（1390），および gasta eþel「魂の（帰るべき）故郷」としての「天国」（1405）の意味で用いられている[38]。用語 neorxnawang の周辺に，「光」と「故地」と「魂」を表わす語句が置かれていることに着目すべきだろう。この事実が，以下にさらなる考察を進めるための導きの糸となる。ちなみに，これらの観念連合は，旧約聖書の「エデンの園」の記述には認められず，古ゲルマンの楽園思想より発しているように思われる。

古英語の宗教詩「アンドレアス」（キリストの十二使徒のひとり）にも，「天国」を意味する neorxnawang が，「最も輝かしい栄光，最もうるわしき住み処」そして比喩的に「最も楽しき家」と呼びなされた用例がある（102－04）[39]。使徒マタイに対して，このような天国に召されることを約束し，祝福の言葉を与えた「万物の創造主」なる神は，その後，「かの

天上の“故郷”(eðel-rice)」に去ってゆかれた，と記されている（118－20)。ここでも「天国」と「故地」が緊密に連合されている。

すでに二つの小論をもうけたので繰り返しを避けたいところだが，9世紀の古サクソン語の宗教詩『Heliand（救い主)』では，「神の王国としての至上天」をさす複合語 heban wang「天の原」が11回も用いられている[40]。また godes wang「神の原」(1323；1865）や groni godes wang「緑なす神の原」(3082）などの用語は，信仰にあつき義人のみが死後に召され，永遠の命を享受できる「天なる神の楽園」を意味していた（水野1984；2001 b)[41]。

その他の典型例をあげれば，meodo-wong「蜜酒の（館に帰り行く）野の路」は，勇者ベーオウルフが怪物グレンデルの母（女怪）との闘争に勝利して，デンマークのフロースガール王の館をめざす文脈で用いられている（『ベーオウルフ』1643)。そしてデンマークでの遠征を終えた勇者が，故国イェーアトの大地を踏みしめるときに，sæ-wong「海の辺の原」という用語が充てられている。

［5］かくしてかの英傑は　　手勢の者たちを率いて
　　砂地を敢然と歩み　　海の辺の原を，
　　ひらけた浜辺を進んでいった。　　世界を照らす燭光なる
　　太陽が折りしも南より輝き出でた。　　（『ベーオウルフ』1963－66）[42]

woruld-candel「世界の燭光」はほかならぬ太陽を表わすケニングであり，sæ-wong「海の辺の原」の用語とともに，「水豊かにして光あふれる楽園」の基本イメージを形成している。Wong はまさに船旅を終えて，「故郷に無事生還した」勇者が最初に踏みしめた「聖なる野原」であった。

すでに卑見を示したように，グレンデルとその母，および火竜という三大怪物とベーオウルフが対決した場所は，いずれも wang（wong）で表記されており，いわば三種の闘争は，それぞれの怪物によって占拠されていた「豊沃な野原」または「水の豊かな聖地」を，勇者が激闘のすえに奪回することを意味していた（拙論2001 d)[43]。

デネ国のフロースガール王の治世中に，「いとも秀麗なる」館が新築され，Heorot「鹿殿」と命名されたと記されているように，王の「館」はその統治権を象徴している。しかし，やがて怪物グレンデルがその館に夜な夜な襲来し，殺戮と暴虐を繰り返すこと，12年にも及んだという（146－49)。また，グレンデルは「暗闇の支配する夜ともなれば，壮麗な館ヘオロトに居を占めたのだ」(166-67）と明記されている。最終的に，異郷イェーアト出身の勇士ベーオウルフは，まさにその Heorot「鹿殿」の内部にてグレンデルを討ち破ったのだが，その遠征から帰還して，ヒュイェラーク王の前でみずからの戦功を回想して語るときには，闘争の場は「あの“野原”(wang)」と呼びなされている（2001 d)[44]。

［6］「主君ヒュイェラークよ，　　かの大いなる会戦は
　　多くの人々にとって　　もはや隠れもなきこととなっています，
　　あの“野原”(wang）において　　私とグレンデルとの間で
　　いかに格闘の時が費やされたか。　あの場所にて奴は

常勝のシュルド族に対して　　数え切れぬ暴虐をはたらき
悲惨事はいつ果てるとも知れませんでした。　そのすべてに私が報復したのです。」
(2000-05)

この誇らし気な言葉にみられるように，ベーオウルフは，デーン人にとっては「いつ果てるとも知れぬ」苦悩と悲惨からの救出者として出現したことになる。

そしてベーオウルフが対決した第二の怪物，グレンデルの母については，grund-wong「水底の広野」において「その水の領域を50年も統治していた」と記されている（1494－1500)。勇者がまる一日を費やしてその水底に達してみると，brim-wylf「水界の狼」と称された女怪は，「自分の屋敷（hof)」に彼を誘い込んだという（1506-07)。その nið-sele「敵の館」には，「屋根のある広間（hrof-sele）があったために，水が浸入することがなかった」，と記されている（1514-15)。このように，第一と第二の激闘の地はそれぞれ地上と水底であるにもかかわらす，いずれも wang「広野；原」で表記され，その一画に「館」(sele；hof）が立っている。注目すべきことに，第三の魔物である竜の住み処の記述についても，同じような基本連関が認められる。

［7］　その塚穴は“広野”（wong）に
完璧にしつらえてあった。　海の波が寄せるそばで，
岬に新しく造られていた。　匠（たくみ）の技をこらして堅固だった。
(2241－43)

すなわち，この記述にみるように，竜は海辺の wong「野；平原」のなかの塚穴に住んでいたとされるが（2242；2409)，そればかりではなく，その住み処が eorð-sele「土の館」(2410；2515)，eorð-hus「土の屋敷」(2232)，あるいはまた dryht-sele dyrnne「神秘的な（秘密の）殿堂」(2320）とも呼ばれている。dryht-sele は，字義的には「(主君の下に集う）武人たちの館」を意味し，デネ国の「鹿殿」ヘオロトを指す名称（485；767）として用いられている。むろん，王館としてのヘオロトと異なり，恩賞行賞または宴会のために，竜の「土の館」に集う勇士はいるはずもない。すでに詳述したように，この意味において，300年にわたって「土の館」を占拠してきた竜は，家臣を持たぬ「偽王」(a mock-king）であると言える（水野2001d)[45]。

いずれにしても wang「原」と「館」の連関は，ソールが領有したÞrúð-vangar「力の原」と「館」(höll）ビルスキールニルとの間にも認められる（上記引用［1］)。戦死者の半数を受け取るというフレイヤも，天上界の Fólk-vangar「軍勢の原」に住居を構えていたとされる。王の館が，戦士たちが集い宴会を催す場であったように，ソールやフレイヤなどの「神々の原」(-vangar）の一画に位置していた館も，たとえ戦死者とはいえども，多数の者たちの集結する場所として思い描かれていたのだろう。

近稿で紹介したように，E.エルグクヴィストの精緻な研究によれば，異教の神名*Ullinn が，古ノルド語 akr「耕地」，hof「異教の聖域」のほかに，vangr「(牧）草地」と結びついたノルウェー地名がある。Ullensvang という地名（Hordaland 地方）は今でこそ「教会敷

地の周辺の野原」を表わしているが，「ウッリン神の原」を意味し，より古くは「異教時代の民会の場」をさしていたと解されている[46]。ちなみに all-vangr は almanna-vangr の短縮形で，「全員が集う野原」を意味していた[47]。神名ウッリンは，ソール神の継子とされるウッルの古名であるとも説かれるが，後者 Ullr は，「決闘」を司り，弓射る神であり，ゴート語 wulþus「輝き」や古英語 wuldor「栄光」と関連し，より古くは「天の光明」を司る神だったと解されている[48]。いわば人々の寄り集う「民会の野」としての vangr は，そのような天空神が降臨し，その神の裁きを仰ぐには格好の聖地とみなされていたのだろうか。

ちなみに現代ノルウェー語 vang は，seter「(夏期の) 山間の酪農場」の周辺に広がる「放牧地；夏期の牧野」を意味している[49]。たとえば Vang (Hedmark 地方)，Vangen (Sogn 地方)，あるいは Evanger (Hordaland 地方) などの地名に用いられ，Leikanger (More og Romsdal 地方の Stadlandet 岬およびソグネ・フィヨルド) や Leikong (Gurski 島) は，古ノルド語 leikvangir「(家畜の遊ぶ) 放牧地」(複数形) に由来している[50]。これらノルウェーの-vang (r) 地名は，海辺やフィヨルドの近辺，もしくは河川や湖水などの「水辺」から少し離れた所に位置しており，「水辺の放牧地」を基本義として確定できる (拙稿2002c)[51]。

要約すれば，天界の vangr は「神の原」をさし，地上の vangr は基本的に「水辺」に位置し，光明や決闘あるいは民会での裁きを司る神々が来臨する「聖なる野原」と考えられていたようである。そのような古来の「水辺の聖地」を選びだして，戦士たちの集うべき王館が築かれたとみられる。『ベーオウルフ』に登場している三種の怪物たちは，地上と水底と地下界 (「塚穴」) において，それぞれの wang を占拠していた。怪物グレンデルは12年，その母は50年，そして竜は300年の長きにわたって wang を占有していたというのだが，視点を変えれば，これらの魔物たちは，「神聖なる原」を領有する神々の零落した姿であるだろう。

V．不死鳥の住む海のかなたの「原」(wong)

上に紹介したように，古ノルド語 vangr や古英語 wang その他に表徴される古ゲルマンの「原」は，基本的に「この世」(地上界) と「あの世」(天上界) における一種の理想郷を意味していた。その他，古英詩に用いられた幾つかの-wong の複合語をあげれば，義人ノアとその家族が住む「広やかな豊饒の地」が sæl-wong「至福の野」と呼びなされている (Genesis 1293)。また græs-wong は不死鳥の住む「常緑の野」であって，「いとも輝かしき林にて，常に新たなる果実の実る」ところとされ (「不死鳥」78)，同じく will-wong「喜びの野」は，「世界が続くかぎり，死によって損なわれることのない，悦楽の園」の意味で用いられている (「不死鳥」89)[52]。

さて，「不死鳥」と題された古英詩は全体で677行だが，wong が単一語だけでも10回使用されている。当初に問題とした neorxna-wong の 1 例と wong の 2 例が「エデンの園」の意味で用いられているものの，græs-wong「常緑の野」や will-wong「喜びの野」という複合語を含めて，他の wong の用例はすべて不死鳥の住む「野原」の意味で使用されている。きわめて特徴的なことに，ここでは wong は，はるかなる海のかなたの「島」の中に位置づ

けられている（水野1984）[53]。死と再生の鳥フェニックスの伝承それ自体は，古代ギリシア，さらにはエジプトのベヌ伝説にまで淵源するが，ここでは問わない。伝説上のその生息地についても，アラビア，エチオピア，あるいはシリアやレバノンやインドなどさまざまな地域に求められている[54]。

ここで取りあげる古英語の詩歌は八世紀に創作されたが，380行までの前半は，4世紀のラテン詩 De ave phoenice「不死鳥について」を元歌にし，明らかにその部分翻訳の箇所が認められるが，一方ではまったく別の資料に基づき，内容と創作意図においてその元歌とかなり異なっていることが指摘されている[55]。ラテン詩「不死鳥について」は通常ラクタンティウス（260－340年頃）の作とされているが，異説がないわけではない[56]。ポエブス・アポローンやパエトーン，あるいは曙の女神アウローラなどの神々が登場し，基調は異教的であることから，作者はラクタンティウスだとしても，彼のキリスト教への改宗以前の作であろうと推定されている[57]。また，古英詩「不死鳥」の381行以降では，不死鳥の「死と再生」の主題がキリスト教的なテーマに変換されている。すなわち，故地を離れて遍歴したのちに火の中からよみがえったという不死鳥の事績が，アダムとイヴの楽園追放，およびイエス・キリストの「死と復活」の奇跡と関連づけられ，キリスト者として善行を積む者が天国での永遠の命を享受しうることの啓示となる，と説教風に歌い上げている。このようなキリスト教的な寓意は，ミラノの司教をつとめた聖アンブロシウス（339－397年）の著『Hexameron』の影響を受けているとされるが，両者には表現と内容上の微妙な相異も認められている[58]。旧約聖書の「ヨブ記」（29章18節）に関する直接の言及もある（548－49）。

逐一これらの作品の成立をめぐる議論に深入りしていると先に進むことができないので，ラクタンティウスの詩歌との比較考察も最小限にとどめ，古英語の「不死鳥」にみる wong の用法に視野を限定することにしたい。以下では二つの作品の混同を避けるために，ラクタンティウスの「不死鳥について」の詩歌は「ポエニクス」（phoenix）と呼び，同じ不死鳥を題材にした古英詩を「フェニクス」（fenix）と名づけて区別しておくことにする。いわゆる「ポエニクス」詩人が不死鳥伝説の信憑性について，何らコメントを加えていないのに対して，「フェニクス」の作品では，詩人自身が，「私（詩人）が虚言を弄して“伝承歌”（leoð）を集め，（単に）詩作の技法をもちいて述作しているなどと，誰も考えないでもらいたい」（546－48），と特記し，聴衆や後代のわれわれ読者に向けて，この「伝承歌」（leoð）としての内容の「真実性」を強調している。

さて，古英詩「フェニクス」は，「死の苦しみを少しも怖れず，灰の中からよみがえる」不死鳥を語り，その「英雄的な事績」に並び称されるものとして，イエス・キリストが成就した「死と復活の奇跡」を賛美し，そのキリストの教えを信じ，ひたすら善行をつめば，神の恩寵によって天国での永遠の命を授かるであろう，という説教が特に詩歌の後半の基調をなしている。にもかかわらず，不死鳥の住まう wong に関する記述をみれば，旧稿で論述したように，古ゲルマンの「海のかなたの楽園」いわば「水辺の聖島」の基本イメージを反映している。とくに，380行までの詩の前半部において，wong とその周辺に散りばめられた語句を再度確認すれば，異教時代に淵源する基本着想すなわち「水の豊かな光あふれる楽土」のイメージを踏襲していると言えよう[59]。本詩の後半になるにつれて，キリスト教的な寓意に語りが傾斜していっているので，neorxnawong（397）や wong（418；439）が「エ

デンの園」の意で用いられているのも，ある意味ではやむをえないと言えよう。したがって，分析の対象を基本的に「フェニクス」の前半に集中することにしたい。以下では，wong に「広野」または「野（原）」の訳語を与えておく。

［8］　私（詩人）は伝え聞いてきた，　　此処からはるか遠く
東の方角に　　人の子らの間であまねく知られた
類いまれな土地がある。　　その大地の一画は
中つ国（この世）に住まう諸人にとりて　　また民を統べ治める諸王にとりて
近寄りがたきところだ。　　創造主の力によって
罪業を犯す者たちからは，　　遠く隔てられている。　（1－6）

すでにN．ブレイクによって指摘されているように，「はるか離れた東に，幸にめぐまれた土地がある」という，「ポエニクス」の最初のわずか1行が，ここではより多くの語句を費やして6行に改作されている。「私は伝え聞いてきた」という言い回しは，『ベーオウルフ』や『アンデレ』の冒頭に置かれた「われらは聞き及んできた」（We gefrunon）というフレーズと類似しており，伝統的な叙事詩の流れをくむ定型句であるとみなされている。さらに，ブレイクの弁を借りれば，不死鳥の住む土地について，æþele「類いまれな」という用語が最初の50行中で4回も使用され，その他 wlitig「光輝く；うるわしき」や ænlic「比類なき」などの修飾語を駆使して，詩人は「楽園」の深遠なイメージを創出しているが，この種の特性描写は「ポエニクス」詩中には少しも認められない[60]。確かにラテン詩でも unica「比類なき」という形容詞（女性形）が用いられているが，それは，「不死鳥はみずからの死からよみがえるが故に，まさに比類がないのだ」と記されているように（31－2），詩人オウィディウスも評した「長寿を誇る，比類なき鳥」（unica avis）の意味であって[61]，その生息地を形容する用語ではない。

「フェニクス」詩の全篇で，「類いまれな」または「気高き」を意味する æþele が17回も用いられているのは，やはり特異である。ちなみに英雄叙事詩『ベーオウルフ』では，同一形容詞が王・戦士の「尊貴なること」あるいは親族の「卓越性・優秀性」を表わすのに用いられている（198；263；1312；2234）。この事は，戦士社会のある理念が「フェニクス」の歌の根底に隠されているのではないか，と想像させる。

上記の引用箇所においても，たとえば北欧神話のミズガルズの概念に通ずる，「人間の種族の居住地」としての middan-geard「中つ国」の用語が置かれているのは決してゆるがせにできないだろう。その「類いまれな土地」が，folc-agend「民を統べ治める王」たちにとっては「近寄りがたきところ」だと明言されている。いかに民を治める王者とはいえ，神を信ぜず，この世で「罪業を犯す者たち」は，「創造主の力によって」，その楽園にいたる道が阻まれているのだ，というキリスト教的な説教が早くもここで打ち出されていることが分かる。いわば異教の勇士や諸王とは好対照にして，信仰にあつき敬虔なキリスト者にのみには「天の王国にいたる扉が開けられている」，と歌われている。

［9］　その島は比類なきものだが，　　これを造りしは，かの創造主にして，

いと気高く貴き方　　そして大いなる力の持ち主だ。
そこでは至福に満ちた者たちにとっては，　　妙なる調べを聞く歓びがあり，
天の王国にいたる扉が　　しばしば開け放たられてある。
それは喜びの“野原”（wong）にして，　　緑なす林が，
天が下に広がりわたっている。　　（9－14）

「比類なき島」という表現要素も，ラテンの「ポエニクス」には認められない。はるか東方の海のかなたの「比類なき島」に，天上界に召される入り口としての「喜びの野原」（wynsum wong）があるというのだが，いわば「聖島」と wong の連合そのものは古ゲルマン的な思念に基づいているだろうか。ただし，ここでは聖島は神によって造られたことになっている。hleoþra wyn は直訳風には「妙なる旋律の歓び」を意味し，天に召される至福なる者たちのみが聞くことを許された，いわば天上の音楽であり，後でより詳しく語られているように，不死鳥の甘美なる歌声をさしている。「いかなる楽音よりも甘美にして美しく，いかなる旋律よりも魅惑的で，角笛もホルンも，竪琴の調べも，地上のいかなる者たちの声も，…（中略）…その歌声には遠く及ばない」と記されている（131－39）。このような「不死鳥の歌声」についての表現形式は，基本的にはラテン詩「ポエニクス」の基本イメージを踏襲し，その部分的な模倣であろう。

［10］　太陽が輝ける門の敷居にさしかかり，
その明け初める優しき光が放たれるとき，
不死鳥は聖なる調べにのせて歌いだし，
妙なる声で新しい日の訪れを祝す。
ナイチンゲールの声もいかな笛の楽音も
広き世界に満ちあふれるその歌声には及ばない。　　（「ポエニクス」43－48）[62]

日の出のときに呼応して，不死鳥が美しい歌声を奏でるというモチーフは，古英詩にも認められる。「太陽が潮の流れの上に昇るとき，その蒼白き鳥は，・・・（中略）・・・天を翔けゆき，太陽に向かって，妙なる調べにのせて歌う」（120－24），と記されている。その一方では，不死鳥は海のかなたより昇りくる太陽をひたすら見つめているとされる。

［11］　飛翔力が強く
翼も誇らしき鳥は，　　空の下，海の上にて，
大いなる潮の流れを　　ひたすら見つめる，
東の方より　　天の光輝（太陽）が
広き海原をこえて　　滑るように昇りくるとき。　　（「フェニクス」99－103）

また，「太陽が南の空に休みにつくとき」には，不死鳥は「三度すばやく翼を振りうごかし，沈黙するばかりだ」（141－45）と記されている。このように，太陽と不死鳥の不可分な関係そのものはラテン詩の描法を踏襲しているものの，元歌には無い細密な描写が随処にほどこ

されている。

「泉」の表現要素についても同じようなことが言える。「ポエニクス」詩では，「平原」の真ん中に「生命の泉」があって，「透き通った，おだやかな流れ」をなしているが，数ヶ月に一度その水があふれて，まわりの大地を潤すことが描かれている（25－28)。それが古英詩になると，「その栄えある鳥は，泉のほとりで，変わらぬ光輝を放ちつつ，湧き出る流れを見守るのだ」と記され，より絵画的につぎのような描写が続く。

［12］　そこで誉れ高きもの（不死鳥）は　　天の燭光なる
陽光の訪れる前に，　　その泉の流れにて
十二度の沐浴をかさね，　　その水を浴びる都度に
甘美なる泉の　　清らな流れから
海のように冷たき　　水を賞味するのだ。　　(106－10)

夜明け前の薄暗がりのなかで，「その蒼白き鳥」(se haswa fugel) が水浴びする光景が眼前に浮かんでくる。繰り返し，その泉の水を浴びておのが身を清め，あたかも不死なる力を身にまとうかのようである。そして，やがて東方の海のかなたより昇りくる太陽を待ちうけ，大空を翔けてその「天の燭光」(swegl-condel) を迎えるための準備をしているかのようである。

さて，フェニックスの住む wong「野原」と wealdas grene「緑なす林（または森)」(13) のイメージの連結は，つぎの詩節にも認められる。

［13］　その森の木々には　　枝葉が茂り
美しき果実がたわわに実っている。　　そこには天が下にも
とこしえに聖なる木々の飾りが　　少しも朽ちることなく，
淡黄色の花が　　その地に落つることもなく，
梢の美しさが衰えることもない。　　そればかりか，木々には常に
いともあでやかに　　枝葉が生い茂り，
いかなる時にも　　果実が新たに実をむすぶ。
その“草原”(gras-wong) では，　　神聖なる神の力によって，
緑の装いもうるわしく　　森のなかでもひときわ明るく
輝きを放っている。　　(71－80)

同じようにラテン詩「ポエニクス」にも，広がる「平原」(planities) と「常緑の木立」の光景が描かれている。

［14］　そこには開けた大地の上を“平原”(planities) がのび広がっている。
墳丘が築かれることもなければ，うつろな谷が大地を切り裂くこともない，
しかし，かの地には12エルの山々がそびえ，
その峰は相当に高いと信じられている。

ここに太陽の憩う林（nemus）があり，そこかしこに木々が茂り，
葉はとこしえに緑なし，実にうるわしき“聖林”（lucus）がある。
（「ポエニクス」5－10）

「そびゆる山」の要素は，「フェニクス」詩にも踏襲されて，「かの光明の地（気高き原）は，天の星星の下の我らが世界で秀麗にそびゆるどの山よりも，12キュービットも高きところにある」(28－32)，と記されている。このように両方の詩歌において，「山」を媒介として「平原」と「常緑の林」の表現要素が並置されている。その意味では古英詩「フェニクス」にみられる「野原」（wong）と木々の「緑」（grene）のイメージの連結は，とりたてて特異とするには当たらないかもしれない。しかしながら，H.T.キーナンが指摘しているように，古英語の宗教詩での grene「緑」は，たとえば出エジプトのイスラエル人が「約束の地」としてのカナンへ必ずや到達しうることを表徴する色彩名であり（古英詩「出エジプト」312)，また，たとえばつぎの用例に見るように，「天国」に通ずる道の色を表わした[63]。

［15］　心にはつねに　　造り主の御力を思い起こそう，
われら，緑の道に向かいて　　上天の天使たちの住めるところへ
赴くようにつとめよう，　　そこには全能なる神がおわします。
（「キリストとサタン」285－87）[64]

いわば「緑」は，遠大なる宿望や祈願が将来的に成就・実現されることを表わす色であった。したがって，「喜びの“野原”（wong)」に，「“緑なす”林が，広がりわたっている」という表現は（13－14)，「天国にいたる扉が開けられている」という先行する語句と緊密な連関を保っている。旧稿で述べたように，古ゲルマン諸語の「緑」には，現代語の green その他が有する「未熟な；生意気な」（ドイツ語 grün，スウェーデン語 grön など）というニュアンスが無かった。否，それどころか，「緑」（古ノルド語 grœnn）は語源的に「生長する」（gróa）概念と関連し，まさに植物が生い育つ大地豊饒のシンボルであり，「天国にいたる園（wong)」は必然的に「緑」でなければならなかった（水野1984)[65]。だがその着想の根底には，「海のかなたの島」として憧憬された「常緑の野原」という古ゲルマンの楽園思想がひそんでいる。

言い換えると，古サクソン語 haban-wang「天の原」や groni godes wang「緑なす神の原」などの用例は，キリスト教の布教に際して異教の楽園観念を到底無視できず，信仰にあつき者たちが死後に召される天国も「緑の原」として喧伝されたことを示唆している（水野2001b)[66]。このような見地をもって改めて上の引用［8］をみれば，folc-agend「民を統べ治める諸王」にとって，海の東に位置する「その比類なき土地」へは「近寄りがたい」という口調は，実に皮肉めいた響きをもって聞こえてくる。本来は，勇猛果敢な王や戦士こそが，「歓びに満ちた，その wong」(7)に赴くことを許されていたはずである。いわば，「フェニクス」詩人がキリスト教的な説教を前面に打ち出し，敬虔なキリスト者のみが特権的に「天国」に召されることを強調する背景には，まぎれもなく古来の楽園思想が渦巻いている。すなわち，「海のかなたの緑野」は不死鳥の住む「喜びの wong」の観念に置き換えられ，特

定の選ばれた戦死者たちが天上の Fólk-vangar「軍勢の原」に導かれゆく，という古ゲルマンの一種の選民思想は，敬虔なキリスト教徒のみが「至福の者」として「天国」すなわち「神の原」に召されるという観念に巧妙に変換させられたのだ。

Ⅵ．戦士たちの主長としてのフェニックス

伝説上，不死鳥は一説には500年，あるいは1461年の長寿をまっとうし，死後にまたよみがえるとされるが[67]，古英語の「フェニクス」詩人は，ラクタンティウスの「ポエニクス」もしくは大プリニウスの記録に依拠したらしく，その寿命の期間を千年としている。不死鳥は「力強く，他のあらゆる鳥たちに対して支配権を得ている」と歌われ，「鳥たちはその高貴なるもの（不死鳥）の周りに群れ集う」とも記されている（「フェニクス」158－59；163－64）。不死鳥についてここに見られる ealdordom「支配権」や，beaducræftig「戦闘力を有する」（286）などの用語が充てられ，この鳥が heaþorof hof「戦闘に名高き館」（228）に住むと記されているので，「勇猛な戦士」たちを従える「理想的な王者」の属性が不死鳥に付与されている，と解されてきた[68]。「年古りて賢い」（gamol gearum frod）という言い回しは，老成した不死鳥を表わす用語となっているが（154；219），叙事詩『ベーオウルフ』なかでは，類似の用語 wintrum frod（2114；2277）が，デネの老王フロースガールや，300年間にわたって財宝を守護してきた竜について用いられている。また，「50年の間」（fiftig wintra）一国を統治し，竜と対決する老王ベーオウルフについても，同じような表現がなされている（2208－10）。

いずれにしても不死鳥は，１千年の寿命の尽きるときがくれば，「西の方へ」飛びゆき，シリア人の土地を訪れ，その「荒地の木陰」に身を潜めて再生のときを窺うという（161－70）。死にゆくフェニックスの復活の地がシリアだというのは，ラクタンティウスの詩と同じであり，そのラテンの詩歌によれば，不死鳥は「ギリシア語で Phoenix と呼ばれるシュロの樹」を塒にするという（「ポエニクス」69－70）。

「孤独なる者」または「孤高なる者」（se anhaga）と呼ばれる不死鳥だが（87；346），西方のシリアへの飛行は，不死鳥にとって孤独な旅ではなかった。「鳥たちはその高貴なるもの（不死鳥）の周りに群れ集い，どの鳥も，その名高き“王者”（teoden）に仕える従者や僕たらんと欲するのだ」と記されている（163－65）。ここでフェニックスに付き随う鳥たちは，戦場で勇猛に戦って死を遂げた戦士たちの魂を表徴しているように思われてくる。いわば不死鳥は，そのような戦士たちを先導する王として，死の試練をくぐり抜けて「あの世での再生」を演じてみせていることにもなるだろう。事実，他の鳥たちにとっての「愛すべき“主長”（leodfruma）」とみなされた不死鳥について，cyning「王」（344）という呼び名が与えられている。ただし，この一例を除けば，他の七例の cyning は，「全能なる神」または「力強き神」あるいは「天なる神」など，すべて旧約の唯一神の意味で用いられている。同様に，上記の「名高き“王者”（þeoden）」が不死鳥をさした用例を除き，þeoden「王」はこの世の「支配主」としての神をさしている（68；605）。

したがって，古英詩「フェニクス」を完成した匿名詩人が真に意図したことは，鳥の「王者」としての不死鳥にまつわる「死と再生」の伝説が，ほかならぬキリストの「死と復活」

の奇跡の証しとなることを訴え，「天なる神」，われらが真の「王」（Cyning）としての神の偉業を賛美せよ，と聴衆に説くところにあった。詩人は，つぎのような説教を付している。

[16]　　やがて啓示のときに
人々にとって　　美しく喜びに満ちた
この鳥（不死鳥）が行いし奇跡が　　明らかとなるであろう，
神の力が　　すべてをよみがえらせ，
墓穴の中から　　骨を寄せ集め，
四肢と肉体とともに　　いのちを司る霊魂を
キリストの膝の近くにたぐり寄せるときに。　　（508－14）

すでに初代教父クレメンス一世（在位：88－97年）が，不死鳥伝説とキリストの奇跡を関連づけて，つぎのように記している。

主は申された。「われには，わが命を捨てる力もあるが，それを拾い上げる力もある」と。もし不死鳥に死して蘇る力があるのならば，主の言葉を疑う者は愚かであろう。…（中略）…この鳥が象徴するものは，われらに主の復活の奇跡を信ぜよと教えているのだ」[69)]

したがって引用［16］の詩節において，伝説上の不死鳥が演じたとされる死と再生のtacen「奇跡」（510）がキリストの復活になぞらえられてあるが，この連関それ自体はむろん詩人の独創によるものではなく，キリスト教の説教の伝統的な手法に基づいている。だが，それにもかかわらず，問題の古英詩は，例えばつぎのように，みごとに蘇生を果たした不死鳥と，キリストの復活をまさに関連づけながらも，異教的な着想の痕跡をとどめている。

[17]　救い主なるキリストは　　天の屋根高く
正義なる者たちの　　魂にむけて光を投げかけるだろう。
輝ける鳥たち　　選ばれし魂たちは，
その至福に喜びつつ　　キリストに付き随い
かの嬉しき“館“にて　　あざやかに若返りて，
永遠の命を得るだろう。　　（589－94）

この詩節において，キリストと不死鳥が「死と再生」の行者として類比関係に置かれているように，それぞれに付き従う信者と「輝ける鳥たち」が相関的に捉えられている。不死鳥の「死と再生」の現場に立ち会った鳥たちは，「選ばれし魂たち」と呼びなされ，復活の奇跡を信ずるキリスト者とほとんど同一視されている。その一方では，よみがえった直後の不死鳥が「キリストの僕」になぞらえられてある。

[18]　この鳥（不死鳥）の特性は　　かのキリストの

選ばれし僕たちに　　とてもよく似ている，
この危難の時代に　　いかに彼らが
天なる父の加護を得られて　　天が下にて
栄光の喜びを享受し，　　あの天上の“故郷“において
大いなる至福を　　不動のものとなすか，
その事を地上にて　　明示しているのだ。　(387－92)

引用［17］の「嬉しき“館”(ham)」と，［18］の「天上の“故郷”(eðel)」は，不死鳥に付き従う「鳥たち」すなわち「選ばれし魂たち」，もしくは「キリストの選ばれし僕たち」が死後に赴くことのできる「天国（の館)」をさしている。「館」がきわめて象徴的な意味を有していることは疑いもない。むろんここに見える選民思想は，旧約より発したキリスト教の所産だが，先述したように古北欧には，選ばれた戦士のみが，天上界のフォールク・ヴァンガル「軍勢の原」に召されるという思想がすでに存在していた。多分に「フェニクス」詩人は，詩作するに際して，死霊神オージンや Valkyrja（「戦死者を選ぶもの」の意）と呼ばれる死界の乙女たちによって，選ばれた者の魂が Valhöll「戦死者の館」に導かれてゆくという，異教思想を到底無視しえなかったのであろう。このように，オージンやフレイヤなどの神々によって選ばれた特定の者のみがあの世に導かれて，とこしえの生を享受できるという考え方を，古ゲルマンの選民思想と仮称しておこう。

それにしても，不死鳥が nest「巣」に棲むばかりではなく，人間界の王者と同じように hus「館」，willsele「楽しき広間」や solere「陽の当たる部屋」に住むというのは，N. ブレイクが推測したように単なる擬人化にすぎないのだろうか[70]。評者たちは，不死鳥の住まう wong「原」の基本概念が「選ばれし者たちが集う館」の概念と密接不可分であることに想到しえなかったように思う。この２項目を根底で結びつけているものは，Þrúðvangar「力の原」や Fólkvangar「軍勢の原」にまつわる古ゲルマンの選民思想であった。ことに本詩201－19行の20行足らずのなかに，nest「巣」(215) を除いても，「家や館」の関連語彙が５例も集中しているのは注目に値する。まず，「その野生の鳥」(se wilda fugel) と呼びなされた不死鳥が「かの荒野の高き梢に，美しく楽しい“家”(hus) を作る」(201－03) と記され，ついで夏季になって，「天の宝石」なる「灼熱の太陽」が照りつけると，「かれの“住み処”(hus) は明るい太陽によって熱せられ」，ついには「草木が燃え上がり，“楽しき広間”(willsele) に甘美なる香りが立ちこめる」という (208－14)。それに続いて，こう歌われている。

［19］　　とその時，炎が燃え立ち
鳥はその“巣”もろとも　　火に包まれる。
火葬（弔い）の薪に点火される。　　こうして“悲嘆の館”は
火炎に呑み込まれ，　　時を移さず，猛り立つ
黄褐色の火が貪り喰い，　　年を古りて賢き
不死鳥はついに燃えゆくのだ。　　(214－19)

こうして，おのが「館」もろともに不死鳥は，焼尽と帰すのだが，やがて再生の時を迎えるという。

[20]　　されど，然るべき時を経て
命がふたたび新たに　　よみがえってくる，
炎の激闘のあとで　　かの残れる灰が
ふたたびともに　　合わさり始め，
収縮して球のかたちを帯びるとき。　　その時に，いと輝かしき“巣”は，
戦闘に名高き“館“は　　火炎に滅ぼされたのに，
清らに改まる。　　(222－28)

このように，老成したフェニックスは，ひとたびは火炎に包まれ，滅び去るものの，やがてその「清らかに新生する館」とともに，「鷲のひな鳥」のような姿となって復活をとげるというのだ（230－36)。だが，なぜ詩人は，不死鳥のみならず，「戦闘に名高き“館”(hof)」までもが，新生することを歌い上げたのだろうか？　もし「フェニクス」詩人が，キリスト復活の奇跡の意義を説くことためにのみ，不死鳥のよみがえりの伝説を紹介したのであるならば，詩歌の基調はこのあたりから説教風に転じてもよかったはずである。だが，実際には360行までは，若返りを果たした不死鳥がこんどは「おのれの古き住み処」を探し求めて飛びゆくことを，繰り返して歌っている。シリアの地は不死鳥にとって終の栖（すみか）ではなかったと見える。「真夜中に降りた甘露」を唯一の糧として体力を養った鳥は，ついに「古き住み処，おのが館」を思い，望郷の念に駆られるという（263－64)。同じことを，つぎのようにも記している。

[21] その時に，ふたたび　　おのが館をめざそうという
思い止みがたく，　　火の残骸を
両足でかき集め，　　爪でしっかと摑み，
ふたたび懐かしきおのが故郷　　太陽に輝く館，
幸いに満ちた故地を，　　喜びにあふれつつ求めゆくのだ。　(274－279)

あえてeft「ふたたび」という語を繰り返すことによって，まさに帰心矢のごとく迫ることを巧みに詠みこんでいる。こうして不死鳥は，ついに故郷の「高貴なる“野”(wong)」に降り立ち（281)，持ち来たった「火の残骸」，いわば古き自己（火で焼かれた不死鳥）の「骨と灰」を，「その“島”(ealond)」の一画に埋めるという（285－87)。そして，まるで何事もなかったかのように，不死鳥は以前と同じように「太陽の僕」としての役割りを果たし始めることが示唆されている。

[22]　　天空の光なる
最高に明るき宝玉，　　高貴なる星（太陽）の光が
東より海原を照らし出すとき，　　かの太陽の僕としての役柄が

ふたたびその体内にみなぎるのだ。　(287－90)

さて，このようにシリアの「荒地」(weste stow:169) での新生の後に，不死鳥がひたすら帰還することを願う「故郷」は，「幸いに満ちた故地」(eadig eþellond)，「かれの古き住み処」(his ealdne eard)，あるいはまた「自分の家」(agenne eard) と呼ばれている。その故郷をめざして飛びゆく不死鳥の姿が，「地上の多くの人々に見受けられると，南や北，また東や西から，遠近から，大挙をなして諸人がやって来る」という (322－26)。「鳥たちも，いろいろな方角から集まってきて，不死鳥を真ん中にして取り囲み」，歌声をもってその偉業を称えると記されている (335－41)。そして鳥たちは，不死鳥を自分たちの「王」(cyning) として讃仰し，その「愛すべき主君」(leofne leodfruman) を「歓喜をもって，故郷へ導いてゆく」というのだが，最終的にはその群れが不死鳥に付き従うことは叶わず，「悲しみに沈みつつ，おのれの家郷へと帰ってゆく」とされる。

[23]　かくして至福に満ちた鳥（不死鳥）は　死の時をくぐり抜けて
おのが懐かしき里　うるわしの大地を
ふたたび訪れることになる。　しかるに，鳥の仲間たちは
“その勇敢なる戦士“（不死鳥）から引き離されて，　悲しみに沈みつつ，
ふたたびおのれの家郷へと帰ってゆく。　(350－54)

引用 [21] と同様に，ここでも eft「ふたたび」という語が繰り返されているが，「至福に満ちた」不死鳥と，「悲しみに沈む」他の鳥たちのそれぞれの飛行について用いられ，その故地への復帰の意味するところはほとんど正反対である。当然のことながら，不死鳥が「ふたたび訪れる」故郷は，以前と同様に，海上の「島」に位置する wong であった (281；320；363)。詩の冒頭でうたわれていたように，「喜びの“野”(wong)」は，通常の人々には近寄りがたく，至福なる者のみには「天の王国にいたる扉」が開け放たれてあったという。鳥たちの「王者」または「その勇敢なる戦士」という呼び名が与えられた不死鳥のみが，その聖地を「ふたたび訪れる」ことができた。だが，他の鳥たちがその地に接近することは許されていなかったかに見える。いささか皮肉めいたことに，彼らが「ふたたび」(eft) 帰るべき「おのれの家郷 (eard)」は，現世における束の間の生を表徴しており，「ふたたび」帰り着いた不死鳥が新たに「1千年の寿命」(364) を享受することになる「気高き“原”(wong)」(281) とはまさに好対照をなしている。

従来の解釈によれば，不死鳥が帰るべき「地上の楽園」のテーマは，異国にて遍歴し流浪の生を送ること (peregrinatio) を強いられた修道僧たちの「懐郷の念」を反映しており，また修行生活を経た隠遁僧が，その死後に，天使の導きによって「故地としての天国」に召される，という信仰より発しているとされる[71]。しかし，「フェニクス」の詩的表現をつぶさに検討すれば，一方ではゲルマン固有の選民思想と「水辺の光り輝く楽園」の基本概念をいまだ濃厚にとどめていると言わざるをえない。

先述したように，不死鳥が鳥たちの「王者」そして「愛すべき主君」であるのならば，その飛行に付き随った鳥たちは，「死せる戦士たちの魂」を象徴しているであろう。ちなみに

詩の中で三回用いられた fugla cynn「鳥の種族」という用語は，いずれも不死鳥のまわりに群がり集まってくる鳥の仲間をさしている（159；330；335)。そして cynn は本来「同族；血族」を表わし，詩中のその他の用例はすべて「人間の種族」をさしている。特に注目すべきことに，fyra cynn「人の種族」(492；535）が，「勝利を司る真の王者」(sigora Soðcyning）と称された神の「裁きの座」に寄り集う人々，いわば天なる神の審判を仰ぐ「衆人の魂」を意味している。おそらく古ゲルマンの選民思想と異教の英雄精神に照らせば，「王者」不死鳥の周辺に集う「鳥の種族」に擬定された勇者たちも本来は，海のかなたに憧憬された wong に赴くことが許容されていたはずである。しかし，ここでは「その勇敢なる戦士」あるいは「孤高なる者」(se anhoga：346）と称された不死鳥のみが，死と再生の試練をくぐり抜けた真の勇者とみなされ，wong「楽土」の中にある「おのが居館（eard)」にたどり着いている。

「この鳥（新生した直後の不死鳥）によって祝福を与えられる高貴な方（キリスト）は永久に不滅だ」と歌われている（319)。その主張を敷衍すれば，「不死鳥からも祝福を受ける」キリストの死と復活の奇跡を信ずることによって，不死鳥と同じように「永遠の命」を享受できる，という説教となりうるだろう。事実，上記［17］で引用したように，「輝ける鳥たち」と呼ばれた「選ばれし魂たち」は，「キリスト（の教え）に付き随う」ことによって，「かの嬉しき“館”(ham）にてあざやかに若返り，永遠の命を得るだろう」と明記されている（589－94)。

さて，weder-condel「天の燭光」または swegles gim「天の宝玉」と称された「灼熱の太陽」(209）が，不死鳥をその「巣」(189；215；227）もろとも焼き尽くしたというのだが，ここで繰り返されている「巣」は，異郷シリアの「荒地」(169）の一画にあり，不死鳥にとっては，再生を果たすための仮の寓居であった。いわばその「古き自己」と「仮そめの家」を炎の中で滅ぼし，そこから蘇った不死鳥が，真に探し求めるべき「古さびた“居宅”(eard)」は，詩中で一回きりだが複数形で wongas「いくつもの原」と呼ばれている（321)。Þrúðvangar や Fólkvangar など，まさに神々によって選出された戦士たちの魂が赴くべき「天上の原」が，同じく複数概念で表記されていたことを想起せざるをえない。古英語 eard は「住居；土地；故郷；地方」のほかに，「大地」と「運命」の意味を有し，たとえば古高ドイツ語 art「農耕；農作地；収穫；出身；子孫」や古ノルド語 örð「農作物；収穫」と同系である。いわば，ある一個の人間が帰属している「先祖伝来の土地」または「血縁同族集団」の概念と密接不可分であった。したがって，このような多義語 eard を修飾している形容詞 eald も単に「古き」という意味ではなく，「古来の」や「すぐれた」といった意味を含むと考えるべきだろう。というのは，eald はラテン語 altus「高い」やギリシア語 alsos「聖林」と語源的な関連があるとされるからである[72]。端的には，「地縁と血縁に基づく運命共同体」の理念が「古き（古来の；大いなる）eard」の語句の中に込められている。

こうして古ゲルマンの共同体の図式をもって言い換えれば，不死鳥が，ひたすらその自己の拠って来たれる「本源の地」に舞い戻ることを希求したのは，ひとりの cyning「王者」として，また fugla cynn「鳥の種族」の代表として，cyn（n)「同族」との新たなる契約を打ち立てるためであった。というのは，cyning「王」は原義的に，cyn「同族；部族」から選出され，そこより由来し，そこに帰属する者を意味していたからである。

さて，1世紀の末にローマの史家タキトゥスによって記されたterra mater「大地の母」ネルトゥスについて（『ゲルマーニア』40章）[73]，ラテン語の神名Nerthusが北欧のNjǒrǒrと一致することについては従来よりほとんど異論がなかった。ゲルマーニア北縁の七族がひとしくこの女神を崇拝したとされる（水野1998）[74]。「海上の島」から女神の依りましきたる聖車を載せて，祭司がユトランド半島のある一画をめざすからには，まぎれもなく「船」による来着を示唆している（水野1996）[75]。牛車に牽かれて女神が「来訪」するにふさわしき所はすべて「祭場」となり，この時，人々のあいだでpax et quies「平和と安息」が強く意識されるという。人々との交渉が終れば，祭司は女神を「神殿に送り返す」とされる。このように海のかなたから来往し，人里に平和と幸をまねき寄せるネルトゥスは，「平和と豊饒」を司る父子神ニョルズ・フレイの特性に合致している。過去の拙論において，折口信夫の用語を適用し，「北欧のマレビト」と命名した由縁である（水野1996その他）[76]。「民会と決闘の野原」と題する近稿でも詳しく論じたように，七部族が共通して崇拝する神が海辺に参着するときを見定め，これを平和と豊饒の祭日として祝祭化し，多分に同族意識を昂揚させたのである。そのときに神霊が降臨し，人々の集う場所がwang（vangr）であった（水野2002c）[77]。insula Oceani「海上の島」のなかのlucus「聖林」より来臨し，人里にしばし滞在したのちにまた「島」へと帰り行くネルトゥスおよびこの神に随行する「祭司」(sacerdos)。この来往と帰去の図式は，「フェニクス」詩に記された不死鳥の飛翔の方向性と基本的に一致している。

不死鳥伝説そのものはギリシアさらには古代エジプトに淵源するが，その「死と再生」の鳥が「光の子」キリストと同化されたとき，不死鳥は「太陽の鳥」としてよみがえった。そしてアングロ・サクソンの匿名詩人によって芸術的に昇華されるにいたるや，その伝説にまさに新しい命が吹き込まれた。しかし，もともと古ゲルマンの民には，不死鳥の歌なぞ聞こえやしなかった。彼らは，キリスト教的な託宣を受けるはるか以前より，地平のかなたの常世郷（Neorxna-wong）と魂の遍歴にまつわる固有の思想体系を保持していたはずである。

天上界のFǒlk-vangar「軍勢の野」の領有者としてのフレイヤは，父神Njǒrǒr（ラテン名Nerthus）の特性を引き継いでいるにちがいない。両義的に「民の野」をも意味するFǒlk-vangarは，平和と豊饒をまねき寄せる神ニョルズの来訪・降臨に際して，「水辺に参集する民の原」がその原義であったと考えておきたい[78]。謎語Neorxna-を解く鍵は，まさに海のかなたより依りまし来る神Njǒrǒrとその系統に連なる神々，すなわちヴァンの三組神の信仰形態にひそんでいることを見定めつつ，みずからの続編を期待したい。

＊本稿は註にあげた過去の拙論をふまえているが，同時に次の公開講演からの発展として「不死鳥の歌」の考察を加えて成り立っている。「救出神ニョルズとその周辺—北欧マレビト考の新展開—」（第20回日本アイスランド学会：大阪外国語大学：2001年6月1日）。

本稿の全体は，国際比較神話学シンポジウム（和光大学：2002年9月6～8日）において，次の英文題名で公表した。“The Song of the Phoenix is Gone Unheard: The Paradisal Field beyond the Ocean and the Old Germanic Idea of Select Warriors.”『竜宮・蓬莱・アヴァロン島』所収．篠田知和基（編）（広島市立大学国際学部，2002）：97－109．

引用詩節の訳出は拙訳に拠る。

註：

1) Richard Jente, *Die mythologische Ausdrücke im altenglischen Wortschatz.* Anglistische Forschungen, Heft 56 (Carl Winter, 1921) 226-7.
2) Jente, 230.
3) Karl Weinhold, "Niordhr, Nordhr, Niorun, Norn, Neorxu." *Zeitschrift für deutsches Altertum und Literatur.* 6 (1846) 461.
4) Albert Leitzmann, "Ags. Neorxna-wong." *PBB* 32 (1907) : 60-66.
5) C. C. Uhlenbeck, "Etymologica." *PBB* 33 (1907) : 182-86.
6) Willy Krogmann, "AE. Neorx(e)nawang "Paradies"." *Anglia* 58 (1934) : 28-29.
7) Ferdinand Holthausen, "Wortdeutung." *Indogermanische Forschungen* 48 (1930) : 254-67.
8) Jente, 226-32.
9) Jan de Vries, ed. *Altnordisches etymologisches Wörterbuch.* 1962 : E. J. Brill, 1977. 411.
10) Bjarni Aðalbjarnarson, ed. *Heimskringla* I (Íslenzk Fronrit, 1941).
11) Peter Buchholz, "Shamanism : the Testimony of Old Icelandic Literary Tradition." *Medieval Scandinavia* 4 (1971) : 7-20.
12) ヘルマン・パウルソン『オージンのいる風景』大塚光子・西田郁子・水野知昭・菅原邦城（共訳）（東海大学出版会，1995）.
13) Krogmann 1934（上記 note 6）参照．その他は Krogmann, "Ags. Neorxnawang." *Anglia* 53 (1929) : 337-44. Krogmann, "Neorxna wang und Iða völlr". *Archiv für das Studium der Neueren Sprachen.* Bd. 191 (1955) : 31-43.
14) Anthony Faulkes, ed. *Snorri Sturluson : Edda : Prologue and Gylfaginning.* Clarendon P, 1982.
15) Tomoaki Mizuno,. "The Conquest of a Dragon by the Stranger in Holy Combat : Focusing on the Mighty Hero Beowulf and Thor."『人文科学論集』<文化コミュニケーション学科編>第36号（2002a）：39-66；58.
16) Cleasby, R. & G. Vigfusson, eds. *An Icelandic-English Dictionary* (1874 : rpt. Clarendon P, 1969) 167.
17) De Vries, 137.
18) 水野知昭『生と死の北欧神話』（松柏社，2002 b）79－117．および旧稿参照：水野，「グルヴェイグをめぐる神々の闘争」『日本大学工学部紀要　分類B』第23巻（1982）：99－117.
19) 水野知昭「異人による聖戦としての竜蛇退治―力の勇者ベーオウルフとソールを中心に―」『鬼とデーモン』所収．篠田知和基（編）(名古屋大学文学研究科，2001d)：103－19；104-05.
20) Guðni Jónsson, ed. *Eddukvæði.* Íslendingasagnaútgáfan, 1954. 一連のエッダ詩の引用は同著からの拙訳である。
21) De Vries, 461.
22) 水野2002b，225.
23) Guðni Jónsson, ed. なお最近，つぎの編著に「巫女の予言」の試訳を提示した。水野知昭，「「巫女の予言」抄訳と略註」『神話・象徴・文学』II．篠田知和基（編）（楽浪書院，2002d）27－54.
24) 尾崎暢殃（編）『古事記全講』（加藤中道館，1966）23.
25) E. O. G. Turville-Petre, Myth and Religion of the North. (Greenwood P, 1964) 85-94.

26) 水野知昭「北欧教会建立伝説の成立背景」『人文科学論集』<文化コミュニケーション学科編>第34号（2000a）：89－114；106.

27) Wilhelm Streitberg, ed. Die Gotische Bible. Carl Winter, 1971.

28) Ioannis Calvini,『カルヴァン新約聖書註解—IX コリント後書—』田辺保（訳）（新教出版社，1977）208.

29) 水野知昭「古ゲルマンの楽園の原風景」『文化』47，第3・4号（東北大学文学会，1984）：1－23；3.

30) Rudolf Simek, *Dictionary of Northern Mythology.* 1984 : Angela Hall, tr. (D. S. Brewer, 1993) 15.

31) De Vries, 214.

32) 尾崎，23.

33) 水野知昭「古北欧の双生神フレイとバルドル—鹿・髪・枝・剣の視点—」『ユーラシア神話の比較—神話と文学—』所収．篠田知和基（編）(名古屋大学文学研究科，2001a)：48-67；58-59.

34) 水野知昭「求愛の使者スキールニルの旅—フレイとバルドルを繋ぐもの—」『日本アイスランド学会会報』20号（日本アイスランド学会，2001c）：22－35；23.

35) 水野1984，1－7.

36) George Philip Krapp, ed. *The Junius Manuscript.* Columbia UP, 1931.

37) Krapp, ibid.

38) Israel Gollancz, ed. *The Exeter Book* : Part I. (1895 : Oxford UP ; rpt. Kraus Reprint Co., 1978) 86.

39) George Philip Krapp, ed. *The Vercelli Book.* Columbia UP, 1932 : 6.

40) Otto Brhagel, hrsg. *Heliand und Genesis.* Max Niemeyer, 1965. Edward H. Sehrt, hrsg. *Vollständiges Wörterbuch zum Heliand.* Vandenhoeck & Ruprecht, 1966.

41) 水野1984，2．水野知昭「古北欧の「中つ国」と「根の国」」『人文科学論集』<文化コミュニケーション学科編>第35号（2001b）：93－119；104.

42) Fr. Klaeber, ed. *Beowulf and the Fight at Finnsburg.* D. C. Heath & Co., 1922. 刊本はこれに拠るが，訳出は拙訳。

43) 水野2001d，111－14.

44) 水野2001d，112－13.

45) 水野2001d，113.

46) 水野知昭「民会と決闘の野原—古ノルド語 vangr と völlr および leikr の考察—」『言語学論集』7（東北大学文学部言語学研究室，2002b）：17-33. Eric Elgqvist, *Ullvi och Ullinshov* (Olins Antikvariat, 1955) 26.

47) Cleasby & Vigfusson, 678.

48) Turville-Petre, 184.

49) Einar Haugen, ed. *Norwegian English Dictionary* (U of Wisconsin P, 1965) 471.

50) Jørn Sandnes & Ola Stemshaug, eds. *Norsk stadnamnleksikon* (Det Norske Samlaget, 1976) 202.

51) 水野2002c，18.

52) N. F. Blake, ed. *The Phoenix* (U of Exeter P, 1964). 本文では以下，この刊本に従う。

53) 水野1984，4－6.

54) R. van den Broek, *The Myth of the Phoenix : According to Classical and Early Christian Traditions* (E. J. Brill, 1972) 305-34.

55) Blake, 24.

56) J. Wight Duff & Arnold M. Duff, eds. *Minor Latin Poets*, II. Loeb Classical Library, No. 434 (1934 : rpt. Harvard UP, 1954) 645-46. 同著にラテン詩 De ave phoenice 所収：650－65.

57) Blake, 18-19.

58) Blake, 20-21.

59) 水野2001 b，104.

60) Blake, 25-26.

61) Duff & Duff, 653.

62) Duff & Duff, 652.

63) Keenan, Hugh T. "Exodus 312 : The Green Street of Paradise." *Neuphilologische Mitteilungen* 71 (1970) : 455-60.

64) Krapp, ed. 1931, 145.

65) 水野1984，8.

66) 水野2001 b，104.

67) Duff & Duff, 655.

68) N. F. Blake, "Some Problems of Interpretation and Translation in the OE *Phoenix.*" *Anglia* 80 (1962) : 50-62 ; 54-55..

69) Clement of Rome, *Epistula ad Corinthios*「コリント人への手紙」(I, 25)

70) Blake 1962, 53-54.

71) Bugge, John. "The Virgin Phoenix." *Medieval Studies* 38 (1976) : 332-50.

72) Ferdinand Holthausen, ed. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch.* (Carl Winter. 1974).

73) J. G. C. Anderson, ed. Tacitus : *Germania.* (1938 : rpt. Bristol Classical P, 1997).

74) 水野知昭「古北欧の「流され王」伝説」『*The Round Table*』13 (慶応義塾大学高宮研究室，1998)：135-46.

75) Tomoaki Mizuno, "Loki as a Terrible Stranger and a Sacred Visitor."『人文科学論集』＜文化コミュニケーション学科編＞第30号（信州大学人文学部, 1996）：69-90.

76) 水野1996；1998. 水野「海原を渡り来るおさな君―北欧のマレビト―」『古今東西のおさな神』所収. 篠田知和基（編）（名古屋大学文学研究科，2000b）183－90.

77) 水野2002c，17－21.

78) 水野2002c，31.